

二〇二一年一〇月二六日（八幡市松花堂庭園参加者一六名）

鴟高音古墳の由来聞きをれば	うつき
秋の蝶木っ葉しぐれに紛れけり	"
築山の古墳はいまし竹の春	"
そぞろ寒輪塔傾ぐ悲恋塚	"
草庵の屋根は茅葺秋日濃し	"
仄暗き障子の奥の玉座かな	せいじ
濡れ縁を借りて一息園小春	"
草庵に落つ竹林の秋日影	"
手入れた杖もて支ふ臥竜松	菜々
紅芒さやぐ奥処は古墳山	"
紅葉且つ散りて一水乱れなし	"
草庵は二畳一と間や秋日濃し	小袖
女郎花長けてさゆらぐ女塚	"
池の面桜もみぢの穢となさず	"
遣り水の澄むに沿ひたる順路かな	はく子
空青し桜紅葉の且つ散りて	"
蝶木の葉舞ひていづれや金風裡	"
末枯の園の一隅女塚	わかば

茶の花や二畳一と間の佗の庵	"
秋の日の射して斜めや躡り口	かれん
水澄みて鯉は錦を散らしたる	"
女郎花供花ともなりて女塚	有香
池の鯉寄りては離れ冬日浴ぶ	"
茅葺に嵩なす紅葉かつ燃ゆる	きづな
小鳥来る園の要の大樹かな	"
たもとほる桜紅葉の池塘かな	泰三
濡れ縁に膝を抱きて秋惜しむ	"
走り根になつまづきそ秋惜しむ	宏虎
松手入すみて整ふ松花堂	ひかり
九十九折過ぎてより水澄めりけり	つくし
車座となる行厨や庭小春	百合
もみぢ散る誰が袖といふ手水鉢	満天
大玻璃に展けし庭の小春かな	"
開け放つ二畳の茶室秋の晴	"

吟行句会みの選

二〇二一年一〇月二六日（八幡市松花堂庭園参加者一六名）